

Title	対人配慮の視点からみる現代日本語の禁止表現
Sub Title	
Author	趙, 騰(Cho, To)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2015
Jtitle	日本語と日本語教育 No.43 (2015. 3) ,p.82- 82
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大学院文学研究科日本語教育学分野修士論文要旨
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20150300-0082

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〔大学院文学研究科修士論文〕

対人配慮の視点からみる現代日本語の禁止表現

趙 騰

対人コミュニケーションの場面では、人間関係を良好に維持・構築するため、相手の感情や立場に対する配慮を伴う言語表現が求められる。その中でも、禁止表現は他人の行為を強制的に制限するものなので、気を遣うべき相手に対して言葉遣いの選択が重要になる。本研究では、対人コミュニケーションの場面で、実際に相手の行為を禁止したり制止したりしようとする時にはどのような言語表現が使われるのか、またそのような言語形式には対人的配慮が含まれるかどうかを考察した。

この論文の全体的構成として、第一章では、言語行動としての禁止表現と、対人的配慮に関係する先行研究を検討し、それぞれの定義などを確認した。第二章は、用例収集の方法と用例分析の手法を示した。第三章では、よく使われる留学生用の日本語教科書から「禁止」を表す表現文型を集め、それらを典型的禁止表現として扱う。第四章はテレビドラマなどから「禁止」の用例を集めて、表現形式によってそれらを整理し、それぞれの言語形式がどんな意味や機能を持っているのか、そして、どのような場面で使われるのか、を考察した。

本研究の考察を通じて、相手の行為を「禁止」するには、日本語教科書にみる「～な」、「～てはいけません」、「～ないでください」以外には、「～ないでほしい」、「～ないように」、「～なくてもいい(です)」、「～と/ては/は、困ります」など様々な表現形式が使われることがわかった。

対人的配慮の視点から見れば、「～ないでくれ」、「～ないでください」、「～ないで」、「～ないでくれますか」、「～ないでもらいたい(んです)」、「～ないでほしい(んです)」などは、「～ないで」の後ろに付く表現形式によって、それらの丁寧さが変わる。しかし、それらは「～ないで」の部分によって、相手に何かをしないことを要求する意図をはっきり伝える表現である。「ないで」の後ろにくる表現形式がどんなに丁寧度が高くなっても、対人配慮の観点からは、相手に対する配慮が不足スル可能性がある。むしろ、それらは全体的に、話し手が何らかの理由によって聞き手に対する不快感や不満を表明するのに多く使われる傾向がある。婉曲な言い方としては、「お/ご～願います」、「～と/～は/～ては、困ります」、「～はちょっと…」などのような言い方が見える。また、対人的場面では、「～な」、「～てはいけません」、「～んじゃない」などは強い語感を伴う表現であるが、語用論的に冗談を言ったり、相手の不利益を避けるため、相手の行為を禁止したり、または相手に対する配慮を示す「慰め・励まし」にも使われる。つまり、その表現が配慮的言い方かどうかを判断するには、禁止表現においても、人間関係の上下・親疎や禁止内容などのような要素と切り離すことができないことも明らかになった。

本研究は、表現形式「～ないでもらえますか」と「～することはない」も「禁止」を言う場合があるだろうと想定し、資料調査を行ったが、それらの「禁止」としての用例が見当たらなかった。今後の課題としては、調査の範囲を拡大し、実際の場面でそれらは「禁止」に使われるのか、使われるとしたら、どのような場面で、どのような内容を禁止するのかを考察していくことが必要だと考えている。